ヘーゲル哲学に於ける自己意識の問題性

——『精神の現象学』を手掛かりにして——

樋　口　善　郎

小論は，ヘーゲル哲学に於ける自己意識の問題性を，彼の主著の一つである『精神の現象学』[1]（1807年）を通して明らかにすることを意図している。何故彼の哲学に於いてとりたてて自己意識が問われなければならないのか。その大きな理由は，ヘーゲルの真理観のなかで自己意識が大きな意義を持っているという点にある。「自己意識とともに我々は今や真理の故郷の国に入ってきた」（103）という言葉がこれを端的に表わしている。このことから，自己意識は真理と密接な連関にあると言うことができる。当然ヘーゲルの学的体系もまた，それが真理の表現である以上，自己意識と連関しているはずである。しかし，それはどういう意味でだろうか。その点に，ここで考察したいヘーゲル哲学に於ける自己意識の問題性が存している。ヘーゲルの学的体系と自己意識とはどのような仕方で関わっているのだろうか。この問題の解明の為には，既に完結した姿を持ったヘーゲルの学的体系それ自体を扱うよりはむしろ，その学の成り立つエレメントの生成を論じた『現象学』を扱う方がよいと思われる。そのエレメントの生成の過程のなかで自己意識がどのように働いているかを取り出す方が学と自己意識との関わりをよりよく示すからである。

I　ヘーゲルの学的体系と哲学的思惟

さて，ヘーゲルの学的体系を支えているものは何であろうか。ここでは，ヘーゲル自身が比較的明瞭に自分の学的体系について述べている『エンチュクロペディー』[2]（1830年）の緒論を手掛かりにしてそれを問うことによってヘーゲル独自の哲学的思惟を取り出し，それの持っている性格を規定しておきたい。

『エンチュクロペディー』によると，哲学は学的体系にならなければならない（vgl.

§14)。そして，その哲学が対象とするのは真理であり，更に「有限的なものの領域，即ち，自然及び人間の精神，それらの相互関係，及び，それらとそれらの真理として神との関係」(§1) である。しかし，そうしたものを哲学が対象とするからと言って，それが直ちに学的体系をなすわけではない。哲学が学的体系であることを保証するのは「必然性」(ebd.) であるとされる。つまり，諸対象の持っている必然的な結び付きを示すことである。ここで問題となってくるのは，示すことができる以前に諸対象はそれ自身必然的な結び付きを持っていなければならないという点である。まさにヘーゲルは諸対象に必然性を認める立場を取っている。それは，「ヌースあるいは，より深く規定された場合，精神が世界の原因である」(§8) という言葉に端的に表現されている。しかし，同時に，その対象が学的体系の内容をなす場合，それは意識との関わりのうちにあるという点に法意を払っておくべきである。このことは次の引用からも明らかである。「哲学の内容は，生きた精神の領域そのもののうちで生み出され，また現在生み出されつつある内容，意識の世界，意識の外的及び内的世界にされた内容にほかならない」(§6)。その点からすれば，学的体系の内容をなすのは，世界の原因としてヌースあるいは精神に起因する必然的な結び付きを持った諸対象を意識との相関のなかで捉えたものということになる。しかし，対象が意識に現われてきたものであるからと言って，それはその必然性に於いて現われるわけではない。人間の意識内容は「感情や直観や表象」(§2) というような形式を取って現われる，とヘーゲルは言う。ヘーゲルは，これらの形式によって諸対象の本来持っているはずの必然性が覆い隠されると考えるのである。では，この必然性は一体どうやって捉えられるのだろうか。ヘーゲルは，哲学には「哲学固有の認識方法に対する要求」(§4) があり，その方法は「思惟」(§5) だと言う。しかし，ヘーゲルの学的体系を支えるようなこの思惟とはどのような意味での思惟なのだろうか。

ヘーゲルは『エンチュクロペディー』のなかで思惟について次のように述べている。思惟は「ルターの宗教改革の時代以降，近世になって独立を勝ち得て再び栄え」，「現象界の一見無秩序とも見える素材に向かっていった」。そして，「確かな基準及び普遍的なものの認識」，「必然的なものや法則の認識」に従事するものが哲学と呼ばれるようになった。しかもその場合，「ひとがある内容を受け入れ信じるには，自分自身がそれに接しなければならない」ということになった (§7)。ここで叙述されている思惟は近世以降の経験諸科学的思惟である。こうした思惟の自立的な在り方をヘー

ゲルは肯定的に評価している。しかし，ヘーゲルは同時にそれに不充分さをも見ている。一つは，ここには「自由，精神，神」というような，内容の点で無限的な対象が含まれていないという点であり（vgl. §8），もう一つは，経験諸科学で示される普遍が特殊との連関を持たず，偶然的であること，またそれらの学が直接的なもの，与えられたもの，前提されたものから出発すること，これらのことからそれらの学の方法が必然性の形式を満足しないという点である（vgl. §9）。こうした二点から思惟はヘーゲル独自の「哲学的思惟」（ebd.）でなければならないとされる。では，この哲学的思惟とは一体どのようなものであろうか。それが経験諸科学的思惟の不充分な点を克服した思惟とされていることから，それはさしあたり，諸対象のなかに埋もれている必然性を捉え，それらの「本来の姿」（§5）を照らし出し，「自覚的な理性と存在する理性即ち現実との調和」（§6）を作り出すような思惟と言うことができるであろう。

このようにヘーゲルの哲学的思惟を理解した場合初めて，ヘーゲルの学的体系は必然性を有したものになることができる。言い換えれば，ヘーゲルの学的体系は彼独自の哲学的思惟によって支えられているのである。しかし，ヘーゲル独自の哲学的思惟に対する先の性格付けはまだ不充分なものである。ただ，次のことは確認できる。即ち，ヘーゲルの哲学的思惟が近世以降に登場した思惟の在り方と，より一般的に言えば，主観性の在り方と関わっているという点である。

II 『現象学』と自然的意識

ヘーゲルの学的体系を支えているのは，ヘーゲル独自の哲学的思惟であった。その性格を更に解明する為に，学のエレメントの生成を論じるとされる『現象学』を通してその思惟の成立の根拠とそこでの主観性の働きを論じてみたい。

ヘーゲルの最初の体系的な著作『精神の現象学』は，自然的意識が未教養な立場から絶対知にまで高まる道程の叙述を通して学のエレメントの生成を論じている。しかし，自然的意識の道程を叙述することが何故学のエレメントの生成を示すことになるのだろうか。それを議論する為には最初に，自然的意識がどのようなものかを示しておかなければならない。

まずヘーゲルの自然的意識は，理屈をこねる思惟（räsonieren）を行なう意識である。『現象学』の序論によれば，理屈をこねる思惟とは，「内容からの自由，内容に対

する自惚れ」(41) である。つまり，理屈をこねる思惟は，経験の内容に対して自惚れを持ち，それ故内容のなかに入らないで非現実的な思想のなかであれこれと理屈をこねるのである。この意味でその思惟の在り方は否定的な意義しか持たない。従って，こうした思惟を行なう自然的意識は，歴史的に形成された根拠のない諸表象，例えば，主観，客観，神，自然，悟性，感性というようなものを立て，それを何か不動のようなもののように考えて，それらの表象の間を右往左往し，経験の内容のなかに入っていかないものだと言うことができる。

さて，自然的意識のこうした性格付けに一体どういう意味があるのだろうか。ヘーゲルは『現象学』の序論のなかで，哲学が学に高まる時代が来ていると述べている。この背景には，世界史の歩みがその時代に至るまで精神的財を記憶・内化 (erinnern) し，今やそれが新しい質的飛躍を遂げるような臨界点に立っているというヘーゲルの時代に対する洞察が存している (vgl. 14f.)。ヘーゲルはこの精神的財の記憶・内化を意識にとっての「非有機的自然」(25) と考える。内化された精神的財は，その意識の自然本性を規定するものであり，ヘーゲルの表現を用いれば，「精神的実体」(21) である。しかし，それが有機化されていないことから，それが自分の自然本性であることは自覚されていない。何故自覚されないのか。それは，意識が理屈をこねる思惟という性格を持っていることによって，自分と精神的実体との間に様々な表象を立て，その精神的実体を自分とは疎遠なものと見なすからである。従って，哲学が学に高まろうとする時代に，哲学を志しながら，記憶・内化されてきた精神的財のなかの自分の自然本性に目を向けることができず，その哲学の学への高まりの必然性も認識できないでいるような意識が自然的意識なのである。

しかし，自然的意識はそうした否定的な性格のみで特徴付けられるべきではなく，その肯定的な側面，つまり，意識が経験を行なっていくという面が見逃されてはならない。経験とは，「直接的なもの，未経験なもの，つまり，抽象的なもの」がその現実性と真理の姿に於いて表現され，「意識の所有物」になるということである (29)。これが肯定的な側面と言えるのは，意識にとって疎遠なものである精神的実体がこの経験を通じて意識の所有物になっていくからである。つまり，この経験こそが意識を動かし，意識と精神的実体との間の様々な表象を取り除く原動力なのである。

だが，こうした二側面を持つ自然的意識の道程を叙述することが何故学のエレメントの生成を示すことになるのだろうか。自然的意識のこうした在り方は明らかに，前

章で述べた，哲学的思惟以前の表象の立場，あるいは，経験諸科学的思惟の立場と同質のものである。従って，自然的意識の道程の叙述が学のエレメントの生成に繋がるという事態は，単純に言って，これらの立場が乗り越えられ，ヘーゲル独自の哲学的思惟が獲得されるということに相当する。しかし，どうやって自然的意識の立場が学の立場に繋がっていくのだろうか。そこで，次に自然的意識の道程の性格を立ち入って分析してみよう。

自然的意識は，自分自身で作り出した様々な表象によって自分の自然本性たる精神的実体との間に隔壁を立て，それが自分の自然本性であることを自覚できないでいるのであった。自然的意識の道程の過程とは，この様々な表象の交替のことである。しかし，そうした諸表象の交替によって意識が精神的実体を自分の自然本性として自覚することは容易ではない。それは，自然的意識に於ける理屈をこねる思惟の根強さに基づいていると考えられる。そこで，自然的意識は逐一それぞれの表象に足を止めて，それぞれを自分の経験に照らして吟味し，それを取り除いていくことになる。この取り除きを通して自然的意識は精神的実体を自分の自然本性として自覚しようとするのである。だが，この取り除きの完遂はどうやって保証されるのだろうか。

ヘーゲルは自然的意識の道程を同時に精神の運動と捉えている。つまり，自然的意識が自分で作り出した表象によって自分自身の自然本性たる精神的実体から区別されるという事態は，精神が主観の力によって自分のなかに区別を作り出し，一方で意識としてあり，他方でその対象たる精神的実体としてあるという仕方で捉え直される。また，自然的意識がその経験によって表象を取り除き，自分の自然本性を精神的実体のなかに見出すという事態は，精神が主観の力によって区別を再統一するという仕方で捉え直される。しかし，この精神自身に於ける区別の再統一は，単に区別以前に戻ってしまうような再統一ではない。なぜなら，この再統一は，自然的意識が精神的実体を自分の自然本性として知るという働きを伴っているからである。この働きによって精神は，自分のなかに作り出した区別を克服する限りで，自分を，区別を作りつつそれを克服するものとして，即ち，精神として知るのである。従って，自然的意識の道程がこのような精神の運動として捉えられる限りで，意識とその自然本性たる精神的実体との隔壁の取り除きの完遂は保証されると言えるであろう。また，ここで同時に注目すべきことは，意識がその自然本性たる精神的実体との隔壁を取り除くことによって，つまり，精神が自分を精神として知ることによって学の透明 (durchsichtig)

なエレメントが生成してきているということである。何故透明だと言えるのか。このエレメントでは，精神が対象を，自分自身から自分を区別して作り出したものとして，つまり，精神の存在している一定の姿として知っていることによって，対象との区別は直ちに取り除かれることができるからである。従って，意識とその自然本性たる精神的実体との隔壁が取り除かれること，精神が自分を精神として知ることが同時に学のエレメントの生成に，そしてヘーゲル独自の哲学的思惟の成立にもなっているのである。

以上のことから明らかになったように，『現象学』に於ける自然的意識の道程は，それが同時に精神の運動として捉えられる限りで，学のエレメントの生成及びヘーゲル独自の哲学的思惟の成立を根拠付けることになる。そしてまた，その成立を可能ならしめるのは，隔壁を取り除く意識の主観性，あるいは，区別を再統一する精神自身の持つ主観性の働きだということになるのである。ところが，ここに問題が生じてくる。『現象学』はその構造上，意識と対象との間に精神を前提することによって，諸対象の隠された必然的な結び付きを捉える哲学的思惟の成立を根拠付けている。このような前提を設けることは，一種の循環をはらんでいるが，ヘーゲルが世界の原因としてのヌースあるいは精神を認めている点で理解されることができる。だが，哲学的思惟の成立がそのような前提によって構造的に保証されているなら，哲学的思惟の成立は時代に関わりのない無時間的なものになりはしまいか。この問題に答えるには，意識あるいは精神の持つ主観性について考察してみる必要があるだろう。

III 『現象学』に於ける主観性

学のエレメントの生成及びヘーゲル独自の哲学的思惟の成立の為には意識あるいは精神の持つ主観性の働きが必要であった。しかし，この働きは無条件にその思惟を成立させるのではない。この成立の条件を，『現象学』の本論を通して示してみたい。

『現象学』の前半で問題となっているのは，自然的意識が実体に辿り着くまでの過程である。対象の真理性のみを確信する意識の立場，逆に自分の真理性のみを確信する自己意識の立場を経て，自然的意識はそれら二つの方向の統一たる理性として主観と客観の同一性の概念に達する。この抽象的な概念の実現に至る為に自然的意識は更に，観察や行為の立場を経て，普遍的理性の立場に達し，実体に辿り着くとされる。

この普遍的理性とはどのような立場であろうか。この立場に立った自然的意識は，観察や行為の立場でのように現実を，観察されたり変革されたりするような疎遠なものとして見なすのではない。むしろ意識は，自分の目的が現実のなかに自分を直接的に表現することにあると自覚している。しかし，意識はまだ，この自己表現が可能であると無邪気に確信しているに過ぎない。意識は現実に関わり，そこに自分の意図が正しく表現されたと主張する。これは一見，主観と客観の同一性の概念が実現されていることを示しているように見える。だが，他の意識がこの現実に関わり，それについて口を挟むことによって，意識の主張するその現実の同一性は脅かされることになる。意識はここで自分の確信を放棄し，この現実が自分個人のものでなく，それの形成には他者も招かれていると自覚せざるを得なくなる。そして，それによって意識はより高い段階に立つことになるのである。各人の参与の産物であることが自覚された現実は同時にその各人の自然本性をなす実体である。自然的意識は，各人が作り上げながら同時に各人が拠って立つようなこの精神的実体を，自分の自然本性がそこに表現されているものとして自覚するようになるのである。ここに，主観性が大きく転換し，精神性・共同性を含んだ主観性とでも言うべきものが成立しているのを見ることができる。しかし，まだ自然的意識と精神的実体との間に立てられていた隔壁が完全に取り除かれるというわけではない。自然的意識と精神的実体との関係が直接的である為に，そこには容易に分裂が入り込むからである。

精神の章で論じられるのは，精神的実体自身のなかでの意識の様々な運動，共同性と関わった主観性の様々な在り方である。最初の人倫的世界では意識は，実体を自分の自然本性と知り，「確かな信頼」(254) によって人倫的共同体と結び付いている。しかし，この結び付きが直接的であることから，意識の主観性によってそこには容易に分裂が入り込み，意識と実体とは切り離されてしまう。ヘーゲルはこの切り離された状態を「法状態」と呼ぶ。意識はそこでは行為の規範を欠いたアトム的人格になってしまう。この悲惨な無秩序の状態から抜け出る為に，意識は自分の主観性を放棄し，自分を他なるものとなった実体に譲り渡す。これが教養形成の世界である。しかし，意識は啓蒙と革命を通じて，他なるものに譲り渡された主観性を再度自分のなかに取りもどし，自分の主観性に実体を置き，失われた人倫性を再興しようとする。これが道徳性の世界である。この道徳性の世界は，良心の立場に於いてその頂点に達する。

良心の立場とは，その自己確信に於いて具体的な正義を知っているものである。しかし，これが人倫性の再興であるには様々な問題を含んでいる。良心はどれだけ状況についての知識を持つことで正義を知っていると言うことができるのか，良心の内容は個別的な感性に由来し，普遍性を持たないのではないか，というような問題である。そこで，良心は自分の行為に信念を持っていることを他者に対して言表し，承認を求めようとする。しかし，行為する良心の言表した義務内容は，あくまで自分の個別的な感性に由来していることから，他の個別性に，あるいは，普遍的なものに対立することになる。自分の個別性と他の個別性ないし普遍性との不等性の故に，この行為する意識は「悪」(356) と呼ばれる。しかし，他者の意識も実は自分のうちに一定の義務について確信を持ち，この行為する意識を批評することから，両者は実質的には同じである。だが，行為する意識は自分の悪を告白し許しを求めるが，批評する意識はそれを拒む。ここに両者の対立は極まる。しかし，この対立のなかで二つの意識の間に「和解の諾 (das versöhnende Ja)」(362) が現われる。

何故対立のなかに和解が現われるのだろうか。ヘーゲルは，ここに啓示宗教と同じ運動が起こっていると考える。ヘーゲルによれば，啓示宗教の母胎は法状態である。つまり，個人が自分の実体を失い，アトム的人格になった状態である。そこで，それを精神的に克服しようとする啓示宗教は，実体が自己意識となり，その自己意識が普遍的な自己になる運動をその概念に持つものになる。啓示宗教によって個人は，その概念の表象，つまり，神の子の生と死，復活という表象を通じて自分の本質が普遍的な精神であることを知り，教団という精神的共同体に参与するのである。これと同じく良心でも，行為する意識と批評する意識との対立が頂点にまで高まったとき，両者の間に実体が求められる。それは，各々の意識が自分の主観性に対するこだわりを捨て，お互いに和解し合うところに成り立つ。啓示宗教では表象の形式で示されていた自分の精神性が良心では意識自身の運動によって示されるのである。ここに，自分の主観性の自覚的な放棄という媒介的運動によって人倫性・共同性を再興するような主観性が成立しているのを見ることができるだろう。

こうして良心の立場が啓示宗教の媒介を経て和解に至るとき，意識は既に精神性を獲得し，良心の立場を突き抜け，絶対知に辿り着いている。そこでは自然的意識と実体との隔壁は完全に取り除かれ，それが分裂に晒されることはない。なぜなら，意識は，主観性の自覚的な放棄という自分の運動によって生み出され媒介されたものとし

て実体を知っているからである。従って，意識は，主観性の力によって作り出されていた表象によって実体から区別され，その表象によって実体を動かしているが，最後に同じく主観性の力でその区別を止揚するものとして自分を知るのであり，こうして自分を精神として知る精神になるのである。このように見てくると，哲学的思惟の成立の条件とは，『現象学』のなかで出現する様々な主観性の在り方，とりわけ，尖鋭化され極まった主観性の在り方，それから，自分を放棄して精神性・共同性を含むような主観性の在り方だと言うことができるだろう。

Ⅳ　自己意識の問題性

今まで，ヘーゲルの学的体系が彼独自の哲学的思惟によって支えられていること，その思惟の成立が『現象学』の場合，精神の運動によって根拠付けられていること，しかもその精神の運動が主観性の在り方によって規定されていることが明らかになった。ここでは，これらの議論を踏まえてヘーゲル独自の哲学的思惟を解明し，そこから，彼の学的体系がどのような意味で自己意識と連関しているのかという自己意識の問題性を明らかにしてみたい。

前章で見たように『現象学』の本論は，様々な主観性の在り方を叙述し，最後に良心という，主観性の尖鋭化され極まった在り方を通じて絶対知を導き出している。こうした叙述は，ヘーゲル自身が歴史的事実に対する言明を避けているが，明らかにギリシアのポリス的共同体以降の西欧の歴史を念頭に置いている。この点から見れば，絶対知に相当する時代はヘーゲルの時代ということになる。ヘーゲルは，彼の時代に於いてロマン主義的な良心の立場[3]がキリスト教の教説の媒介を経て絶対知に転じると考える。従って，絶対知とは，ロマン主義の立場を乗り越えたとするヘーゲル自身の立場である。では，絶対知に於いて到達されたものは何であろうか。勿論，意識が精神的実体を自分の自然本性として自覚し，自分を精神として知る精神になり，学の透明なエレメントを生成させるということが第一に挙げられる。しかし，指摘しておきたいのは，それが同時に概念という形式を成立させるという点である。意識の運動の到着点は，行為する良心と批評する良心との交替である。つまり，行為する良心が現実のうちに出て自分を充実するという側面と，批評する良心が自分のうちに閉じ篭もるという側面が交替し合うのである。これによって自分の外化を含んだ概念，つまり，

自分の他在にありながら自分の下にある概念が成立する。こうした概念を獲得することで意識は「概念把握する知」(427) に，ヘーゲル独自の哲学的思惟になることができる。従って，絶対知たるヘーゲル哲学の立場とは，このような概念を有した哲学的思惟の立場だと言うことができる。

ヘーゲル独自の哲学的思惟はどのような性質のものなのだろうか。それは第一章で述べたようにさしあたり，諸対象の隠された必然的な結び付きを捉えるものである。更に，それは第二章で明らかになったように，意識と対象との間に前提されていた精神の自覚的形態，つまり，精神の自己知である。しかし，第三章で示したように，哲学的思惟たるこの精神の自己知が到達されるには制約がある。それは，単純に言えば，歴史である。ヘーゲルは，自分の時代を，世界史の歩みが精神的財を記憶・内化し，質的飛躍を遂げるような臨界点にまで達した時代，つまり，哲学が学にまで高まる時代だと考えているのであった。しかし，自然的意識はその時代にあって，その内化された精神的財を自分の自然本性と考えることも，哲学の学への高まりの必然性を認識することもできないようなものであった。しかし，意識は，『現象学』のなかで出現する様々な主観性の在り方を通り抜け，最後に良心を通じて絶対知に辿り着き，これによって哲学的思惟になる。これは，つまり，意識が世界史の影絵を通り抜け，ロマン主義的な良心の立場の克服を通じてヘーゲル哲学の立場に辿り着くことを経験して，内化された精神的財を自分の自然本性と考え，哲学の学への高まりの必然性を認識するようになるということである。従って，ヘーゲル独自の哲学的思惟の成立は，世界史の歩みがそのような質的飛躍への臨界点にまで達していることをその制約とするのである。第一章の最後で述べた，哲学的思惟と近世以降の思惟あるいは主観性との関わりもこのような点から理解することができる。このように哲学的思惟が世界史によって媒介されているという点で哲学的思惟は，意識の対象たる精神的実体即ち精神的財を自己化し，自分の所有物にする自己意識[4] である。この自己意識は，精神性・共同性を含んだ自己意識である。なぜなら，この自己意識は，良心の自覚的な自己放棄を通して絶対知に辿り着いた意識だからである。またこの自己意識は，自分の主観性に対するこだわりを自覚的に放棄しているのであるから，自分の得た精神的財を展開することができる。ヘーゲルは，このことを次のように表現している。「自己意識は，それが実体全体を意識からもぎ取り，実体の様々な実在性の構造全体を自分自身のうちに吸収し，そして様々な実在性を自分から生み出し，従って同時に意識に対

してまた再興してしまうほどまで，豊かになっている」(428f.)。哲学的思惟は，このような，実体を自分のものにして豊かになり，逆にその富を自分から展開するような自己意識として考えられている。このように理解すると，哲学的思惟の性質がはっきりしてくる。哲学的思惟は，理屈をこねる思惟のように内容に対して自惚れを持たず，自分の作り出した思い付きや私念を内容のなかに持ち込まず，自分の自己を放棄し，内容のロゴスの動きとともに歩みながら，同時に自分を失わず進んでいくような思惟である（vgl. 38ff.)。この思惟の在り方は，自己意識が自分の所有物にした富を展開し，それを再び吟味していくことのなかで自分と現実との同一性を見出していくような事態に相当している。このように見るならば，ヘーゲル独自の哲学的思惟は，豊かにされた自己意識をそのうちに含んでいるのであり，逆に言えば，『現象学』に於けるこのような豊かにされた自己意識の成立が概念把握する哲学的思惟を可能ならしめていると言うことができる。この意味でヘーゲルの学的体系は，まさにそれを支えている哲学的思惟の根幹をなしている自己意識と密接な連関にあるということになるだろう。

纏めておきたい。ヘーゲルの学的体系は哲学的思惟によって支えられている。だが，その哲学的思惟は，『現象学』によれば，歴史上の精神的財を記憶・内化し豊かになった自己意識である。ヘーゲルの学的体系は，この自己意識を理解してこそ充分に理解されるのである。つまり，この自己意識は『現象学』を通じて対象を自己化して豊かになり，逆に学的体系のなかで対象のうちに自分を認識し，自分と現実との調和を作り出そうとするのである。このようにヘーゲルの学的体系のなかで対象の必然性を取り出してくる自己意識の働きを理解することにこそ，ここで考察したかったヘーゲル哲学に於ける自己意識の問題性が存しているのである。

註

(1) 以下，『現象学』と略記する。引用の括孤内数字は，特に指定のない場合は，次の版のページ数である。G. W. F. Hegel: „Gesammelte Werke", Bd. 9: „Phänomenologie des Geistes". Hrsg. von W. Bonsiepen und R. Heede, Hamburg, 1980.

(2) 以下，引用の際は，パラグラフ数を示した。テキストは次のものによった。G. W. F. Hegel: „Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830)". Hrsg. von Fr. Nicolin und O. Pöggeler, Hamburg. 1975.『現象学』とは体系構想が異なる『エンチュクロペディー』をここで取り

上げることは，確かに問題を含んでいる。しかし，ヘーゲルが学的体系に対して抱いていた大まかなイメージは，大きく変わっていないと思われる。小論では単に手掛かりとするに留めた。

(3) 良心の立場をロマン主義的と規定するにあたっては次の論文を参考にした。E. Hirsch: *Die Beisetzung der Romantiker in Hegels Phänomenologie.* In „Materialien zu Hegels 〉Phänomenologie des Geistes〈". Hrsg. von H. F. Fulda und D. Henrich, Frankfurt am Main, 1979.

(4) 自己意識をヘーゲル解釈の中心に据えた研究として特に注目したのは，次の著作である。W. Marx: „Hegels Phänomenologie des Geistes", Frankfurt am Main, 1981. その他，自己意識の重要性を強調した研究として次のものを参照した。Otto Pöggeler: *Hegels Phänomenologie des Selbstbewußtseins.* In „Hegels Idee einer Phänomenologie des Geistes", Freiburg/München, 1973. W. Bonsiepen: „Der Begriff der Negativität in den Jenaer Schriften Hegels", Bonn, 1977. (=„Hegel-Studien" Beiheft 16)

〔哲学　博士課程〕

Die Problematik des Selbstbewußtseins in Hegels Philosophie

——Eine Betrachtung anhand der „Phänomenologie des Geistes“——

Yoshiro HIGUCHI

Mit diesem Aufsatz bezweckt der Verfasser, die Problematik des Selbstbewußtseins in Hegels Philosophie anhand der „Phänomenologie des Geistes“ zu erörtern. Die Problematik bedeutet die Frage : Welchen Zusammenhang hat Hegelsches System mit dem Selbstbewußtsein?

Worin besteht Hegelsches System überhaupt? Damit seine Philosophie zum System erhoben wird, muß sie die Notwendigkeit ihres Inhalts zeigen. Es ist Hegels eignes philosophisches Denken, das die Forderung erfüllt. In diesem Sinne kommt sein System daher, daß sein eignes Denken die Notwendigkeit der Gegenstände begreift.

In der „Phänomenologie“ erhebt einerseits das natürliche Bewußtsein sich vom ungebildeten Standpunkt bis zum absoluten Wissen und überwindet seinen Gegenstand, nämlich die unorganische Natur, anderseits weiß es, daß sie seine Natur selbst ist, weil sie der durch die Weltgeschichte angesammelte geistige Reichtum, seine geistige Substanz ist. Wodurch begründet sich die Vollendung von seiner Erhebung? Sie wird zugleich als die Bewegung des Geistes erfaßt. Ihre Vollendung wird begründet dadurch, daß der Geist seine Entzweiung überwindet und sein Wissen von sich selbst erhält.

Aber die Begründung ist nicht zeitlos, sondern geschichtlich. Um das absolute Wissen zu erlangen, muß das Bewußtsein die verschiedenen Subjektivitäten in der im Schattenrisse nachgezeichneten west-europäischen Weltgeschichte erfahren. In der Zeit, worin der geistige Reichtum reift und ein qualitativer Sprung vorbereitet wird, organisiert das Bewußtsein den Reichtum, und subjektiviert die geistige Substanz. Erst darin besteht die Entstehung des eignen Denken Hegles. Daher kann man sagen, daß sein eignes Denken eigentlich das Selbstbewußtsein ist, das vermittels der Geschichtlichkeit sich bereichert. Daraus kann die besondere Eigenschaft von Hegels eignem Denken sich erklären. In diesem Sinne hat Hegelsches System den Zusammenhang mit dem bereicherten Selbstbewußtsein.